

沈没男

海野十三

青空文庫

(×月×日、スカパフロー発)

余は本日正午、無事ロイヤル・オーク号に乗艦せるをもつて、御安心あれ。

余は、どうせ乗艦するならば、いきのいい海戦を見物したいものと思ひ、英国海軍省に對し、ドーヴァ、ダンジネル、ハリツチの三根拠地のいずれかにて、英艦に乗込みたき旨要請したのであるが、それは彼の容れるところとならず、わざわざ北方スコットランドのそのまた極北のはなれ小島であるオークニー群島へ送りこまれたのは、甚だ心外であつた。このスカパフロー灣は、相手国たる独国の海軍根拠地ウイルヘルムスハーフェンを去ること実に五百六十哩の遠隔の地にあり、独国軍艦にお目にかかるのには、外野席以上の遠方の地点で、これほど縁どおいところはない。

余は、いささか憤慨して、軍港副官にどなり込んだのであるが、彼はむしろ意外だという顔つきで、余のためにこれほど、生命の危険なき安全なる軍港をえらび与えたのに、なにが氣に入らぬかといひ、四分の一世紀前の第一次欧州大戦のとき、ここが如何に安全であつたかという歴史について、諄々説明があつた。あのときには、しばしば英国全艦隊がこの港内に集結して鋭氣を養つていたそうで、すでに試験ずみの安全港である

そうな。

余が乗艦したロイヤル・オーク号は、現在このスカパフロー碇泊中の軍艦中で一番でかい軍艦であつて、二万九千五百トンの主力艦であり、速力は二十二ノット、主砲としては十五吋砲を八門、副砲六吋十二門、高角砲四吋八門、魚雷発射管は二十一吋四門という聞くからに頼母しい性能と装備とを有して居り、ことに高角砲分隊の技術については、英海軍中第一の射撃命中賞を有しているとかの噂も聞いて居り、さてさて素晴らしい軍艦に乗せてもらったものだと思つて居る次第である。現に只今も、独機八機現われるという想定のもとに、どすんどすと空砲をはなつて、猛練習であるが、その凄い砲声を原稿に托して送れないのが甚だ残念だ。これより余は艦長にインタビュウすることになつているので、ロイヤル・オーク号乗艦第一報をこれにて終る。

(×月×日、スカパフロー発)

余は今、純毛純綿のベッドに横わりながら、昨日に引続き、スカパフロー発の第二報の原稿を書いているところである。寝ていては、報告が書きにくいので、起きようかと思うが、すぐサラ・ベルナルのような顔した看護婦が来て、上から押さえるので、やりきれない。もつとも余は、すっかり風邪をひいて、かくの如く純毛純綿の中にくるま

つて宝石のような暮しをして居れど、頭はピンピン、涙と洩どが一緒に出るし、悪寒発熱でガタガタふるえている始末、お察しあれ——といったのでは、よく分らないかもしれないが、早くいえば、余は只今、ロイヤル・オーク号上に居るのではなく、スカパフロ―軍港附属の地下病院の一室に横わっているのである。

余は、乗艦後二十四時間もたたないのに、こんな病院に横わろうとは、夢にも思わなかった。これは決して、余が小胆のあまり自ら進んでロイヤル・オーク号から降りたわけではなく、只今では、生きている人間は、全部該艦から締め出しを食っているのだから誤解のないように。だから、余も亦こうして生きている限り、あの艦には乗れないのである。余は、無理やりに退艦させられしまった。しかも一時間十五分というものを、夜の北海の、あの冷い潮に浸っていたのであるから、まことに御念の入ったことであつた——という訳は、わがロイヤル・オーク号は、昨夜、スカパフロ―港の底に沈んで了つたのである。

余は、なんにも覚えていない。あのととき夜の甲板へ、新鮮なる空気を吸いに出たことまでは覚えていたが、あとは知らない。そうそう、大爆発があつたことは知っている。とたんに、艦は大震動したつけ。甲板を走つていく水兵が、「独軍の飛行機の空襲だ。爆

弾が命中したぞ」と叫んでいたことを、今思い出した。しかしプロペラの音は全然しなかったのである。仍よつて案ずるに、独軍では、無音飛行機むおんを使っているか、乃至ないはグライダーをもつて、わがロイヤル・オーク号を空爆くうばくしたものにちがいない。

(×月×日、照国丸てるくにまるより)

余は、ロイヤル・オーク号事件にて少々健康を痛めたのを口実に、英国を去り、仏国へ行っていた。これは、ちよつと英国という国が、癩しやくにさわつたのにも原因する。しかし個人の鬱憤うつげんのため、一時にもせよ、原稿のネタを仕入れるべき地元英国じもとを去つたことは、甚はなだよくなかつたと気がついたので、遂ついに再び英国入りを決し、幸さいわい照国丸がロンドンへ向うことがわかつたので、船室のないのを承知のうえで、無理やりに頼みこんで、ようやく同船の特三等船客となることができた。

只今は、朝食を終つたばかりであるが、船は今、ドーヴァを左に見て、いよいよこれよりチームズ河口へ入ろうとしているところだ。附近は、独国海軍の侵しんにゆう入を喰い止めるために、到いたるところに機雷原きらいげんが敷かれてあるので、かなり面倒なコースをとらなければならぬ。しかし安心なことには、英国海軍当局は、わざわざパイロットを、わが照国丸に配置してくれたので、もう心配はない。さつきは、船橋せんきょうに、このパイロットが松まつく

倉船長と肩をならべて、なにやら海上を指しているのを見た。軍人あがりとかいう噂だが、なかなか逞しい面構えのパイロットで見るからに頼母しく感じた。

この調子では、夕方までには、ロンドンに入港することが出来る筈である。

前方にハリツチ市が見えてきた。あれこそ、余が最初、派遣を願い出でたるハリツチ海軍根拠地のあるところであった。わが照国丸は、ドーヴァを越えてすぐ左折し、チームズ河へ入るものと思いの外、そんな様子も見せないで、ずんずん真直に進行している。やがて、これではハリツチの海岸にのりあげそうである。なんだか、余の気が、船をハリツチの方へ持つていくように感ぜられて愉快である。

さつきは、同室内に乗合わせているノールウエー船（シンガポール沖で撃沈された船）の乗組員にインタビューし、その神秘的な遭難談を原稿にとった。いずれ明日までに整理のうえ、送稿する。

今、甲板で、さわいでいる。なにごとかと聞いたところ、オランダの汽船が、機雷にやられて沈んでいるのが見えるそうである。水面から二本の煙筒を出しているのが見えるという話だ。遭難船なんてめずらしい観物だ。これから甲板へ駆け上って、写真にうつして置こうと思う。だから原稿は、一先ずここにて切る。

(×月×日、ハリツチ発)

ハリツチ発などと書くと、余が、とうとう初一念を貫いて、ロンドン上陸後、このハリツチへ来たように邪推するであろう。しかし、事実は、大ちがいだ。

前報を打電して、それから一時間たつたに、わが照国丸は、沈没してしまつたよ。どういうわけか、余の乗つた艦船は、いいあわせたように、あつけなく沈没してしまふのである。縁起でもない沈没男だ。

しかし今度は、海水の中に漬けられないで助かつたよ。さすがは、やはり祖国日本の汽船の有難さだ。船長以下船員たちが、避難作業のときの、あの沈勇なる行動は、どんなに激賞しても、ほめすぎるといふことはあるまい。

余は、それを悉く映画におさめたので、本日、なんかの便を得て、そちらへ送ろうと思ふ。原稿の方はすぐ続いて打電するつもりだ。只今、炊き出しを呉れるというから、これで一応報告を切る。こちらの炊き出しは豪勢だ。七面鳥のサンドウィッチに、ウイスキーの角壘、煙草はMCCだ。

(×月×日、グラーフ・シュペー号にて)

しばらく通信を怠っていたが、余は三たび艦船をかえ、今は独国豆戦艦グラーフ・シ

ユペー号上で、安泰あんたいに暮している。余が、何処より、本艦に乗込んだか、それは語ることを許されない。しかし諸君が、北海ほっかいの地図をひき、ユトランド諸島のあたりを子細しさいに検討するなら、そこに或る暗示を得るだろう。

本艦の位置も、これまた遺憾いかんながら、語る自由を持たない。ただこういうことだけは言ってもいいだろう。それは毎夜の如く南十字星みなみじゆうじせいが、美しく頭上に輝いている事だ。但し、プラネタリウム館へ入っている訳ではない。

シュペー号では、ラングスドルフ艦長以下が、余を親切に扱ってくれる。本艦上には、シュペー号に撃沈された英国船九隻の船長その他の幹部乗組員が収容されているが、彼等とて、むしろ厚遇こうぐされているようだ。今しも彼等が、甲板を散歩しているのが見える。あ、今、何かがあつたらしい。甲板上を走る水兵の眼の中にも、何かあつたらしい事が、よく見える。艦橋には、艦長以下幕僚ばくりょうたちが全部集つて、しきりに双眼鏡そうがんきようで覗のぞいている。また英国船を見つけたのであろうか。それにしては、すこしものものしい緊張ぶりだ。

そこへ余の姿を求めてヴォード少尉が駆けてきた。

「あ、海野さん。海戦が始まりかかっています。相当大きな音がしますから、貴下あなたも船せんて

底へいかれた方がよいと思います」

余は、胸をはって、即座に断つた。

「いや、ここにいます。どうか僕にはお構いなく、大きな音を出して闘っていただきたい。いつたい、敵は何者ですか」

「英国の重巡エクセターです」

「エクセターなら、平気じゃないですか。向うは八吋砲、こっちは十一吋砲……」
そういつているところへ、モルトケ少尉がヴォード少尉を呼びに来た。

「おい、ヴォード少尉、すぐ二番砲塔へ」

「よし来た。だが、僕は補充隊員だぜ」

「所が、急に敵が殖えたのだ。軽巡アキレスとエジヤクとの二隻が加わろうとしている」

二人の少壮士官は、一しよに駈けだしていった。それを合図のように、シユペー号の主砲六門は、一せいに火蓋を切つた。

あつ、命中だ！ 英艦エクセター号の艦側から、濛々たる黒煙があがる。余は……
（編集部より申す。海野ニセ武官のブンタデレステ沖の海戦報告は、無電によってここ

までは、本社と連絡がとれて、受信中のところ、ここでぶつりと電波は切れました。多分氏自慢の携帯用送信機が英艦の砲弾のため破壊されたのでしようと思いますが、生々しい報告を生々しいところで失い、甚だ残念ですが仕方ありません。御諒承を乞う。なまなま

尚、なほ海野ニセ武官の冥福を、読者諸君と共に祈り上げる次第であります。

(×月×日、モンテヴェイデオ、先さきはらい 払電報)

マタ、フネハシズンダ。コレデ三ドメダ。ヨハ、ラングスドルフカンチヨウニタイシ、イサギヨクコウガイニイデ、イギリスカンタイトタタカウヨウススメタガ、カンチヨウイワク、「ウンノサンニノラレタウエカラハ、ドウセ、ハヤカレオソカレチンボツノウンメイニアルノダカラ、ムシロハヤイトコ、ジバクトキメマシタ」シユペーゴウノリクミン四〇〇メイハ、ドイツキセンタコマゴウニウツリオエタ。ヨ、ヒトリハ、チンボツオトコナルヲモツテ、ケイエンセラレ、タコマゴウニハノセラレズ、チヨクセツモンテヴェイデオコウニリクアゲセラレタリ。イノチビロイノイワイニパイヤリタシ、スグ〇オクレ、ウンノ。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第10巻 宇宙戦隊」三一書房

1991（平成3）年5月31日第1版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

沈没男

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>